

都市建設の光と影

— 深圳文学に見る「拓荒人」と「打工者」 —

高橋 俊

はじめに

「歴史の新しい都市です」。深圳を紹介するとしたら、おそらく多くの人がこの言葉から始めるだろう。そう、深圳は「新しい都市」である。

数千年の歴史をさかのぼることも可能な中国の都市の中で、深圳の「三〇年の歴史」というのは比較にならないほどに新しい。世界でも有数の「歴史の浅い都市」だろう。

しかしその深圳は、成立からわずか三〇年で、人口が一千万人を超え、北京・上海・広州と並んで中国四大都市に数えられるまでに発展した。ここまで急速に発展を遂げた都市もまた、世界でも例を見ないだろう。

本稿では、その深圳の都市建設の物語について考察したい。

深圳は、一九八〇年に鄧小平の改革開放路線により経済特区に指定されたことにより、都市開発の歩みが始まった。

「三〇年の歴史」はこの年を起点としている。「特区」は深圳市のキャッチフレーズになっており、深圳市文聯（深圳市文学芸術界聯合会）の機関誌は『特区文学』と名付けられ、一九八二年に創刊されている。改革開放後の経済発展の波に乗った深圳は凄まじい勢いで発展を遂げ、市民一人あたりのGDPが中国の都市で初めて一万ドルを超えるなど、中国でも最も豊かな都市となっている。

その深圳では、都市建設がどのように語られてきたのか。私は以前、上海における「都市成立の物語」について論じたことがあるが、本稿は、この深圳版の、序説といえる。一方で、本稿は都市文学研究の試みでもある。近年、中国では、各都市の文学・文化に関する研究が盛んになってきている。なにせ広大な国土ゆえ、中国の各都市の文学を論じることが、本来、ヨーロッパの各国文学研究並の意味を持つはずである。が、いっぽうで中国は、その広大な国土が一つの国としてまとまっており、各地域の地域性・

地域色は、ヨーロッパに比べれば圧倒的に薄い。

しかし一方で、近年、中国の諸都市が、自分たちの都市の物語を語る動きが見られるようになってきている。それはいわゆる「街興し」が目的であることが多く、「おらが村」を誇るための材料であることが多い。プロジェクトの資金の出所も省や市の文化政策部局である場合が多い。

深圳における文化叙述も、おおむねその流れに乗ったものであるとはいえよう。しかし、深圳の文化叙述・物語には、新しい都市であるがゆえに、他都市には見られない特徴があるのである。

本稿では、深圳文学の特徴を、「拓荒人」と「打工者」という、二つの人物形象から分析したい。それぞれが深圳の「光」と「影」を映し出す者たちでありながら、それはまた、表裏一体をなす存在でもあるのである。

一 開拓者たち——「拓荒人」の物語

インターネットで「深圳」を検索すると、ニュースやウェブ記事で、「拓荒人（開拓者）」というキーワードがきわめて多く使われているのが分かる。

事実、都市建設に携わった者たちは、中国全土から結集し、ごくごく小さな町だった深圳⁴を、巨大都市へと変えていったのである。そういう意味で、彼らはまさに開拓者

の名にふさわしいといえる。

深圳の「拓荒人」は、たとえばアメリカのそれような「孤高のヒーロー」⁵ではなく、国家や党に身を捧げた忠実な軍人として描かれることが多いのが特徴である。

本章では、段亜兵『深圳拓荒人——基建工程兵創業紀実』という本をもとに、深圳における開拓者物語を分析していく。同書は、深圳の都市建設に携わり、その後各界で活躍した人々の事跡を記したものである。文学作品とはいえないかもしれないが、都市建設物語を分析する上で、格好の資料になるといえる。

まず興味深いのは、同書のタイトルにもあるように、開拓者たちが「兵」に喩えられていることである。所収の図版でも、深圳の都市建設当初に各地からやって来た人々が、まるで従軍する兵士のように写された写真が使用されており、まさに戦地に赴く戦士たちのように形象されている。

同書の序文に「戦士・学者」というタイトルで文章を寄せている人民解放軍の少将・常生榮は、著者の段亜兵とは甘肅の同郷であり、甘肅省の嘉峪関市における大型鉄鋼事業でともに基地建設に携わった仲だという。序の中で、常生榮少将は幾度も「战友」という言葉を使いながら、自作の詩を交えて、自分たちが都市建設においていかに勇敢に「戦ったか」を記している。

彼「段亜兵・高橋注」は『創作中国第一的深圳人』という著作の中で、「中国共産党」中央が改革開放政策を実行する過程を記し、広東省の指導者たちが政治上の困難を乗り越え経済特区を作り上げた熱情を描写し、基建工程兵二万の部隊が初期に深圳経済特区に入って創業した感動を記録した。深圳改革開放の先頭に立つ兵士が勇ましくも「一筋の血路を切りひらく」行動をとったその作用のおかげで、全国の全面的な改革開放の局面を形成することができたのである。

書中で、一人の戦士・軍人がいかに成長したかの過程が描写されている。彼らは風雨を経て、挫折に遭いながら、鍛錬しながら成熟し、成功の喜びを味わったのである。

この中で触れられ、また同書の書名にもある「基建工程兵（基本建设工程兵）」とは、人民解放軍の部隊名。一九六六年に設立され、全国各地の開発に従事した。とくに七六年の唐山大地震の時には救出・復旧作業に活躍し、八三年に解散した。彼らが一九七九年に派遣され担当したのは、深圳の都市建設であった。なお、深圳が香港との「国境」に位置していたため、派遣当初は香港に駐留していたイギリス軍と緊張が走ったという。ゆえに、開拓者が兵として

記述されるのは、まったくの比喩ではないのである。事実、段亜兵も、まさに基建工程兵として都市建設に従事（従軍）した一人であった（後述）。

一方で作者の段亜兵は、自らのことを「墾荒牛」とも呼んでいる。

私はさらに「墾荒牛」という呼び名が好きである。

荒れ地を開墾しなければ、収穫もない。荒れ地を開墾するのは苦しいことだが、喜びも伴い、収穫が上がるにつれ幸福と楽しさも増すのである。「中略」すべての深圳人はみな「墾荒牛」であるといえよう。最初の「墾荒牛」がこの地で木の根を引き抜き、石を掘り、土地を拓き、ビルを建てなければ、このように世界を驚かす近代都市はなかったのだ。⁷

国家・党の忠実な兵であるとともに、鈍重な牛として地道な開墾に従事する。深圳の「拓荒人」は、こうした二面性を持つものであった。

深圳都市建設の物語としては、呉啓泰・段亜兵の手になる中編報告文学、「深圳・両万人的苦痛与尊嚴」がきわめて興味深い。深圳で発行されている文学雑誌『特区文学』一九八六年第五期に掲載されたこの作品は、深圳都市建設の様子を描いたルポルタージュである。この時期の深圳都



深圳に到着した基建工程兵



作業場に向かう基建工程兵

(図版はともに『深圳拓荒人』より)

市建設を描写したものとして有名であり、つねに取り上げられる作品でもある。

誰も何が起こったのかわからなかったが、その粗野な叫び声が聞こえた後、人々はベランダや窓に殺到し、屋上に上り、期せずして狂ったような叫び声をあげ、上から酒瓶、レンガ、空き缶、ゴミなどを投げつけた。

当時基建工程兵の戦士であり、現在は市の建設会社の下請けで土木作業に従事している、二三歳の彝族青年・王風采のベッドはベランダに向いていた。彼はベッドから飛び降り、同部屋の者たちとベランダに向かった。最初彼は何が起こったのかわからず、暗闇の中の驚天動地の騒ぎの中で気持ちを落ち着かせた。血は今までにないほどに高ぶり、肩、胸、そして腹の筋肉は明らかに緊張していた。彼は思わず叫び、吠えたくなった。

「黒暗中的騒乱（暗闇の騒乱）」という、この小説の冒頭の章の一節であるが、まるで敵襲かのような騒乱の原因は、停電である。しかしここでは、「弾丸」「弾薬」などの言葉を使いながら、彼らがいかに「勇敢に戦った」かのような描写が続いていく。

作者の段亜兵は、一九五一年甘肅省出身。自らも基建工程兵として深圳の都市建設に参加した。一九九六年には武漢大学にて法学修士の学位を取得している。深圳市の宣伝部副部長などを勤めた後、二〇〇七年に中国作家協会に入した。中国共産党黨員であり、『アメリカは永遠に帝国でいられるか』¹⁰という著書があることから、「愛国者」であることがわかる。これ以外にも著書として、『文明縦横談』¹¹、『富人為何喜歡住倫敦（金持ちたちはなぜロンドンに住みたがるか）』¹²、『創造中国第一的深圳人（中国で最初を創造する深圳人）』¹³、『文化深圳』¹⁴などがある。その肩書きからも、著書からも、彼が深圳の文化の「広告塔」のようなポジションにいることがわかる。

『深圳拓荒人』では、前述のように、深圳建設に携わり、その後さまざまな分野で成功した人たちについての物語が記されている。例えば、華為（Huawei）、ファーウェイの創業者であり現在CEOの任正非の成功物語。華為は一九八八年に設立された通信機器メーカーであり、業界では売り上げがエリクソンに次いで世界第二位。日本での認知度はまだまだ低い¹⁵が、間違いなく世界を代表するメーカーといえる。

任正非についても、日本ではほとんど知られていないが¹⁶、彼は人民解放軍と深い関わりがあるとして、アメリカから懸念を表明されている人物である¹⁶。しかし同書で

は、任正非が人民解放軍出身であることは、当然ながら、誇らしいものとして書かれている。

彼は貴州省の山村で生まれ、貧しい幼少期を送った。重慶の工程学院を卒業、技術者として働いたのち、三九歳の時に深圳に移り、七四年に入隊し、八三年に転業した。その後華為を興し、大成功を収めたのである。

彼の業績の記述は、(ここでも戦いの比喻で語られている)。

華為は「都市は譲り、農村を占領する」作戦で、辺境の国家や地域にも業務を発展させ、静かに力を蓄えていった。「中略」華為は農村から都市に進出し始め、辺境からヨーロッパ、日本、アメリカなどの市場に進軍していった。

華為はシスコとの法廷闘争と同時に、別の戦役も進行させていた。港灣ネットワークの戦火が上がった。瞬間に、華為は国内外の二つの戦線を同時に戦うという不利な状況に追い込まれた。

その他にも、華強集団公司総裁の梁光偉や、深圳市物業集團董事長の馬成礼など、実業界の名だたる人物たちの成功物語が収められ、しかも彼らがみな基建工程兵であった

ことが誇らしげに記されているのである。

このような成功物語は、深圳都市建設のまさに「光」といえるだろう。彼らは深圳の都市建設に「一兵卒」として参加し、一生懸命頑張った、そのおかげで今の成功がある、という華々しいストーリーは、たしかに深圳の都市物語の一部を形成しているし、現在の深圳が「公的に」押しひろめているのは、むしろこちらのストーリーであろう。しかしこうした「光」には、かならず「影」が存在するのである。

二 挫折者たち——「打工者」の物語

前章のように、深圳の物語の「光」の部分が「開拓者の成功物語」だといえるのだが、一方「影」が、「打工文学」といえる。

現代中国語で「打工」といえば一般的には「アルバイト」を指すが、広東の方言では「雇われて常勤的に働く」ことを指し、むしろアルバイトは含まない。よって「打工文学」は「労働(者)文学」ぐらいの意味になるだろう。

「労働者文学」ということであれば、むしろ深圳には限らないのだが、「打工文学」といえば、もっぱら深圳を舞台にした小説を指すようである。打工文学研究の第一人者である楊宏海は、打工文学をこのように位置づける。

「打工文学」とは何か？ 「打工」は広東方言であり、「打工文学」は「打工」という社会群体生活を反映した文学作品であり、小説、詩歌、ルポルタージュ、散文、劇作品などさまざまな形態を取っている。広義でいうと、打工文学は打工者自らの文学創作、そしてある作家が労働生活を題材にした作品を含む。もしその内側と外側をさらに一步開拓すると、その舞台は「中国の」南方にとどまらず、南国から内地「中国の他地域」、そして海外にも拡がるのである。¹⁹

さて、労働者文学というプロレタリア文学が想起されるし、また中国では共産党が一九四九年以来政權を握り続けていることもあって、二〇世紀以降の中国文学の主流はプロレタリア文学である、とされている。打工文学もその流れを汲むものではあるのだが、しかし従来のプロレタリア文学（とされてきたもの）が、労働者や農民の苦しい生活や、資本家の搾取を描くことで、社会の矛盾を暴くことを目的としている、とするならば、打工文学はややその趣を異にする。

「深圳都市建設の」当時、深圳ではこの名言がはやった。「時は金なり。効率は生命なり」。これは労働

者からすると、意味はそそくさと出勤し、タイムカードを押し、そそくさと帰宅し、ご飯を食べ、毎日が流れ作業のようで、身も心も極度に疲労することを意味する。多くの労働者が「私たちは昼間はロボットで、夜は木の人形だよ」、あるいは「私は残業が怖いのが、家に帰るのはもつと怖い。帰ってから何をして時間を潰せばいいのかわからない」などと語っていた。【中略】仕事に疲れ、心身ともに疲労し、精神文化生活に困窮した環境にあつて、労働者たちの文学愛好家たちが率先して筆を執り自分の生活と欲求を書き留めると、すぐに労働者たちの熱烈な歓迎を受けた。²⁰

これは打工文学の「公的な」説明である。従前のいわゆるプロレタリア文学に見られるような、「労働者の悲惨な環境」「資本家の搾取」のような政治的なテーマは、打工文学には見られない。苦しい労働に耐えつつも、生活の中に少しでも楽しみを見出し、明日の成功を夢見る人々の姿を描く。これが、打工文学の特徴とされているのである。

このような「厳しい労働の中に楽しみを見いだせ」というメッセージは、「若い時に苦労すれば、やがて成功する」という流れに続き、第一章で取り上げたような「成功物語」に収斂する場が多い。そしてそれは、私が以前考察した民国時期の『生活週刊』という雑誌と通じるものがある

が²¹、それはともかく、打工文学は、こうした「労働者の熱い思い」で成り立っている、とされているのである。

もちろん、労働者は深圳のみにいるわけではない。深圳の打工文学の特徴は何か。それはやはり、「出稼ぎ」と切り離せないだろう。故郷を遠く離れ、異境の地で都市開発に打ち込む姿。打工文学が描くのはそうした労働者の姿である。労働の中身も単なる金儲けではなく、都市の建設であり、それはまさに国家へ奉仕する姿でもあるのである。

個人の成功も、それはあくまで「若い時に国家のために尽力したことのご褒美」のような位置づけで語られ、一山当てることそれ自体を目的とするような労働の物語は、最初から排除される。

しかし実際の打工文学は、もちろんサクセス・ストーリーのみで成り立っているわけではない。むしろ、労働者の挫折や悲哀が込められた小説の方が、圧倒的に多いのである。

打工文学に多く見られるテーマが、アイデンティティの揺らぎとその哀しみである。

アイデンティティへの焦燥が、打工文学のとりわけ大きなテーマである。一方では「打工者」たちは都市への想像を通じて自らを都市の人間としての身分を構築するが、一方で都市は、その巨大な圧力で正反対の

形象を塑像し、打工者を周辺へと押しやるのである。

この両者の間の緊張関係が複雑な身分アイデンティティの危機を作り出すのである。多くの打工文学作家は根は農村にあるが、いい教育を受け、高等教育を受けた者もいる。ここに、なぜ彼らの書く作品には怒り、迷える知識打工者の形象が頻出するのかの理由がある。²²

前述のように、深圳の労働者は、中国の他地域から来たものがほとんどである。彼／女らは異郷で、成功を夢見て、苦しい労働に耐えている。

一方で労働者の多くは、「安価な労働力」としてしか見なされていない場合が多い。社会が深圳建設に沸き立っている時、肉体労働に従事する労働者は当初「盲流」と呼ばれていた。のちにそれが蔑称であるということ、²³「農民工」へと名前を変えて呼ばれるようになった²³。しかしそこには、今でも明らかな差別的視線が注がれている。

成功者と農民工、同じ地域に住み、同じように都市建設に従事しながら、その境遇は天と地ほど違う。農民工にとつて、それは何よりも辛いことであるだろう。

彼らを苦しめるもう一つの要因は、中国の戸籍制度である。おおまかにいえば、中国には都市戸籍と農村戸籍があり、農村戸籍を持つ者の都市への移住は原則として禁じら

れている。一方で、都市建設・開発において、農村戸籍を持つ者は「安価な労働力」として欠かせない存在となっている。だが、農村戸籍を持つ者は、行政のサービスや福祉、さらには子供の教育も受けられないという状況におかれている。

深圳文学作品でもこのテーマはしばしば触れられている。郁秀『花季雨季』²⁴は、深圳の中学生の目を通して、戸籍がある者となし者との心理的な溝に触れた作品となっている。同じ学校に通う、同じ年代の少年少女が、戸籍がある／ないで分断される。こうした残酷な状況を、この小説は余すところなく表現している。

深圳の「打工者」は決して忘れられたり、無視されているわけではない。深圳市文聯も「打工文学」を積極的に売り出しているようで、「打工文学シンポジウム」なども次々に開かれていくようである。

打工文学によって、深圳都市建設の「影」をなす彼／女らの姿にも、ようやく「光」が当たりつつあるのかもしれない。しかしそれは、「差別」や「格差」の解消につながるのか。あるいはむしろ、それらを強化する方向に進んでしまうのか。こうした状況にも、目を向け続けなくてはならないだろう。

おわりに

以上、深圳の都市建設物語を二つのキーワードで見えた。「拓荒人」については、「何もないところに巨大な都市を切り拓いた」ことが重要なテーマとなっていること、そしてそれこそが、深圳人、そして深圳の開発に携わった者にとつての重要な要素「誇り」となっていることが読み取れた。

続いて「打工」は、「各地から集まった徒手空拳の者たちが、苦労を重ねながらもたゆまず努力し、やがて成功を収める」という物語である一方、彼らのアイデンティティの揺らぎも重要なテーマになっていることが分かった。

さて、「別の場所から何もないところに移り住み、その地で成功を収め、一族を繁栄させる」というストーリーは、じつは中国の伝統的な一族（中国では「宗族（そうぞく）」という）の物語と、近似性を持つのである。中国の、とくに南方においては、各宗族には「族譜」²⁵と呼ばれる一族の系譜や来歴を記した文書があるが、そこでは、「開祖は中原からやって来てこの地に居を定め、田畑を切り拓き、やがて一族から科挙合格者が次々に出て現在の繁栄をもたらした」と記される。その物語の信憑性はともかく、現在に至るまで、こうした「繁栄の物語」は、中国において典

型的なものといえる。²⁶

都市創造の物語はもちろん、深圳だけに見られるものではない。しかし、都市建設に従事した者自らが、現在進行形で物語を紡ぎ上げているのは、世界でもまれなことといえる。今後、深圳はいかなる物語を構築していくのか。その行方が注目されることである。

注

¹ 深圳は二〇一〇年、「三〇周年記念」ということで各界において大々的なキャンペーンを実施した。ただ、市制が施行されたのは前年の一九七九年であり、経済特区に指定されたのが八〇年である。また、二〇一〇年以降、現在に至るまで、深圳は「三〇年の歴史」であるとされることが多い。

文学界でも、周思明『全球化視野与新都市語境——深圳文学三〇年論稿（一九八〇—二〇一〇）』（人民出版社、二〇一〇）や南翔主編『都市文学新景観——深圳作家作品研究…三〇年三〇家』（商務印書館、二〇一〇）など、二〇一〇年に大々的な「三〇周年記念」が打ち出されたが、深圳市文聯の設立は一九八一年、その機関誌『特区文学』の創刊は八二年、深圳市作家協会の設立が八四年であり、一九八〇年には特筆すべき事項はないようである。

² 「上海事変をめぐる報道と上海人アイデンティティの形成——上海における社会・文化変容を通じて——」（『東方学』第一〇

七輯、二〇〇四）。

³ 北京や上海についてはこれまでも都市文化研究が盛んに行われていたが、近年では南京（張勇『文学南京——論二十世紀二三十年代南京文学生態』中国社会科学出版社、二〇一三）や広州（金岱等『城市——作為符号与表征——文化現代化視域中的文化広州論』人民出版社、二〇一〇）など、多くの都市でこうした都市文化研究が行われている。私も、現在青島と重慶の都市文化研究プロジェクトで研究を進めている。

⁴ 元々宝安县と呼ばれていたこの地域は、七〇年代までは人口数万の小都市であった。

⁵ アメリカのヒーローについては、亀井俊介『アメリカン・ヒーローの系譜』（研究社出版、一九九三）、川本徹『荒野のオデッセイア——西部劇映画論』（みすず書房、二〇一四）等を参照。

⁶ 人民出版社、二〇一四。

⁷ 「前言」（『深圳拓荒人』所収）。

⁸ 中国における「報告文学」はルポルタージュのことをいう。

⁹ 本稿では『深圳拓荒人』所収のものに拠る。

¹⁰ 『美国会是永遠的帝国嗎』（春風文艺出版社、二〇〇八）。

¹¹ 社会科学文献出版社、二〇一〇。

¹² 海天出版社、二〇〇七。

¹³ 人民出版社、二〇一〇。

¹⁴ 作家出版社、二〇〇九。

¹⁵ 近藤伸二『アジア実力企業のカリスマ創業者』（中公新書ラクレ、二〇一〇）に記述がある。華為については徐航明『リパ

ス・イノベーション2.0——世界を牽引する中国企業の「創造力」(CCCメディアハウス、二〇一四)に詳しい。

¹⁶ 結局、二〇一四年になって、華為はアメリカ市場からの撤退を表明した。

¹⁷ 『華為在競技場跑贏世界第一』(『深圳拓荒人』所収)。

¹⁸ 打工文学に関して日本で出ている論考は数少ない。管見の限りにおいて、打工文学をもっぱらに扱った論考は、尾崎文昭「底層叙述——打工文学——新・左翼文学」(『アジア遊学』九四、二〇〇六)、李瑩「第一世代「打工文学」作品の主題についての分析」(『現代中国』八三、二〇〇九)、「第二世代「打工文学」作品の主題についての分析」(『知性と創造』二、二〇一一)の三つのみである。

¹⁹ 楊宏海「文化視野中的打工文学」(楊宏海主編『打工文学備忘録』社会科学文献出版社、二〇〇七)。

²⁰ 楊宏海前掲「文化視野中的打工文学」。

²¹ 拙稿「修養する青年たち——『生活週刊』と新しい労働観の生成——」(『野草』八三、二〇〇八)。

²² 楊宏海前掲「文化視野中的打工文学」。

²³ 石曉紅「中国都市における特殊な階層——「農民工」——戸籍制度と社会保障制度からのアプローチ——」(『現代社会文化研究』三四、二〇〇五)。

²⁴ 海天出版社、一九九六年。この小説は当時高校生だった著者によって書かれ、話題となり、数々の賞を受賞し、映画化もされた。

²⁵ 族譜については瀬川昌久『族譜——華南漢族の宗族・風水・移

住』(風響社、一九九六)を参照。

²⁶ 近年においてもこうした宗族を元にした凝集力は見られる。川口幸大『東南中国における伝統のポリティクス——珠江デルタ村落社会の死者儀礼・神祇祭祀・宗族組織』(風響社、二〇一三)。

(たかはし・しゅん 本学教授)